地獄谷野猿公苑 [地獄谷野猿公苑]

地獄谷野猿公苑（じごくだにやえんこうえん）は、人里離れた横湯川溪谷（よこゆがわけいこく）に観光客を呼び込もうと、長野電鉄株式会社が 1964 年に設立したものである。付近の町が拡張するにつれて、サルが食べ物を畑から盗んだり、食べ物をねだったり、道をうろついたりすることが増えたため、人間とサルのトラブルを減らす役割が期待されていた。ここでは、サルの行動にできる限り影響を与えないようにしつつ、観光客が間近でサルを観察できる貴重な機会を提供している。サルは野生のままであり、気ままに自由な出入りが可能である。

ニホンザル (*Macaca fuscata*)、別名「スノーモンキー」は日本固有の種で、ヒトを除く霊長類としては世界で最も北に生息するサルである。ここでは約 160 頭が 1 つの群れを作り、周囲およそ 2 キロメートルの山々を生息範囲としている。1 年の大半は公苑の職員から糲殻付きの大麦を与えられて暮らしており、定期的に、2 大好物であるリンゴと大豆も与えられている。

この公苑のサルは、気温が氷点下 10 度以下まで落ち込む冬の期間、温泉で体を温めることで有名となった。これは学習して得た行動であり、ニホンザルにしてはかなり珍しいといえる。一般的に彼らは濡れるのを好まないからだ。きっかけは、子ザルが近くにある後楽館（こうらくかん）の温泉に戯れに来るようになり、次第にその熱さに慣れていったためと言われている。

その後、大人になったメスザルが子を連れて一緒に温泉に入ること入浴への親しみを次の世代へと伝えていったのである。そして、公苑ができた初期の頃に、職員が彼らのこの珍しい行動に気づき、サル専用の温泉を作ることとなった。

冬を除く気候が温かいうちは、サルたちはあまり温泉に入らないが、季節ごとにユニークな光景が見られる。春は、生まれたてのまだ動きのぎこちない子をあやす母ザルが苑内にあふれる。夏になると、遊び盛りの子ザルが元気にふざけ回り、秋には交尾期の印である鮮やかな赤い顔をしたサルの姿を見ることができる。